別紙３

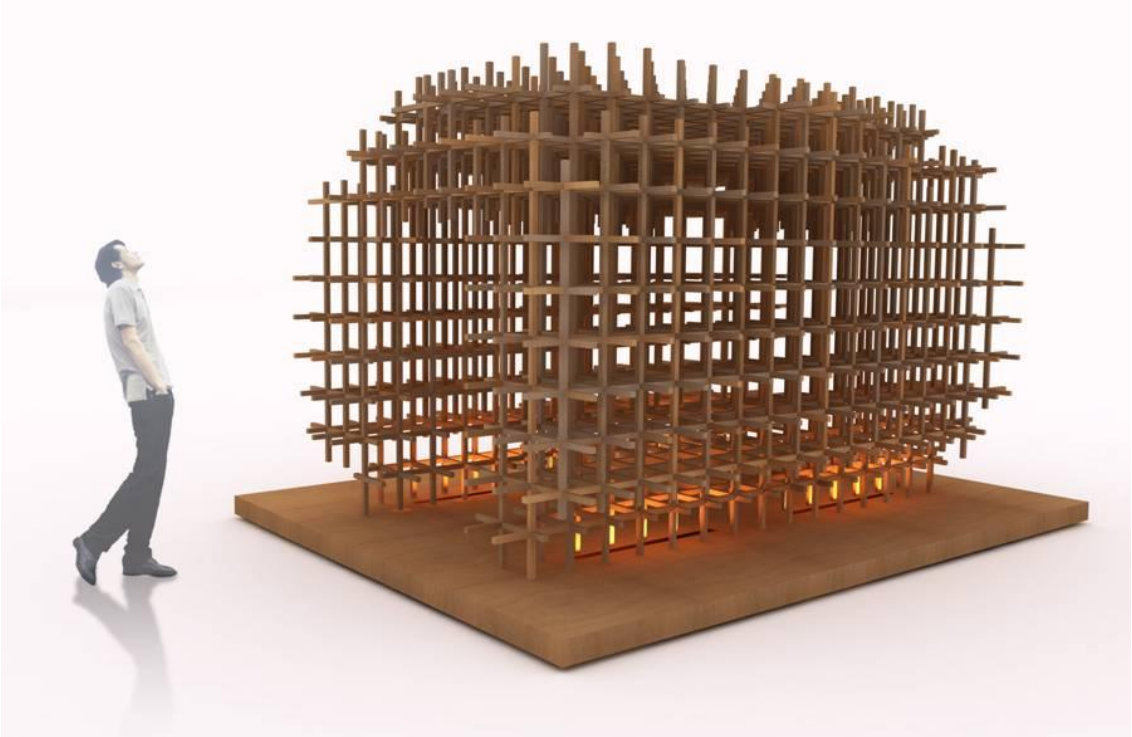
隈　研吾（くま　けんご）／建築家・東京大学教授

1954 年横浜生まれ。1979 年東京大学建築学科大学院修了。コロンビア大学客員研究員を経て、2001 年より慶應義塾大学教授。2007 年～2008 年イリノイ大学にて客員教授を勤める。2009 年より東京大学教授。
主な作品に「森舞台/登米町伝統芸能伝承館」（1997 年日本建築学会賞受賞）、「水/ガラス」（1997 年アメリカ建築家協会ベネディクタス賞受賞）、「石の美術館」（2000 年国際石の賞）、「那珂川町馬頭広重美術館」（2001 年村野藤吾賞）。2002 年木の建築でフィンランドよりスピリット・オブ・ネイチャー　国際木の建築賞受賞。2007 年「ちょっ蔵広場」で Detail Prize 2007 など数多くの賞を受賞。翌年 2008 エネルギー・アーキテクチュアアワードを受賞。2009 年 6 月、フランス政府より芸術文化勲章オフィシエを受ける。
近年のコンペ受賞作はブザンソン芸術文化センター、（2007 年フランス）、グラナダ・パフォーミングアーツ・センター（2008 年スペイン）など。

千鳥　（CIDORI）

飛騨高山は、古くから「千鳥」という巧みに切り込みを入れた木製の玩具で子供たちが遊んでいました。
3 本の木の棒を釘一本も使わずに組み合わせ結合する、大工の里飛騨高山らしいおもちゃです。
この「千鳥」を立体的に展開していって自由自在に空間を創造する仕掛けをつくりました。
釘や道具やエネルギーを用いなくても、特殊技術がなくても、子供でも女性でも老人でも、
この千鳥で自分たちのための気持ちのいいぬくもりのある「住み家」をつくることができます。
千鳥があれば、木の枝を持ち寄り生き物が巣を作ってお互いを暖めあうように住み家をつくることができます。
木の枝を利用して、大事に使うことはもちろん CO2 削減にも大きく役立ちます。

隈研吾



■　伝統技術を用い人の手でつくる

・　大工の里である飛騨高山で古くから伝わる千鳥格子の技術を用いて、自由自在に空間をつくれる仕組みを提案します。
・　3 本の棒を、釘、道具、エネルギーを使わずに組み上げることができます。
・　できるだけ機械を使わずに、人の手でつくることができる「棲みか」とし、CO2 削減を目指します。

■　小さな棲みかで小さく棲まう

・　小さな場所で、お互いを暖め合うように寄り集まって小さく棲むことで、機械的な空調を最低限で抑えられるような、ぬくもりのある新しい人間空間の単位を提案します。

■　どこでもだれでもつくれるフレキシブルな空間

・　釘を使わずにつくれることで一瞬で分解でき、いろいろな場所で再度組み立てることが出来ます。
・　木材をふやせば将来どこまでも延長することが出来ます。
・　特殊技術がなくても、子供でも女性でも老人でもだれでも組み立てることが出来る簡単な仕組みとします。

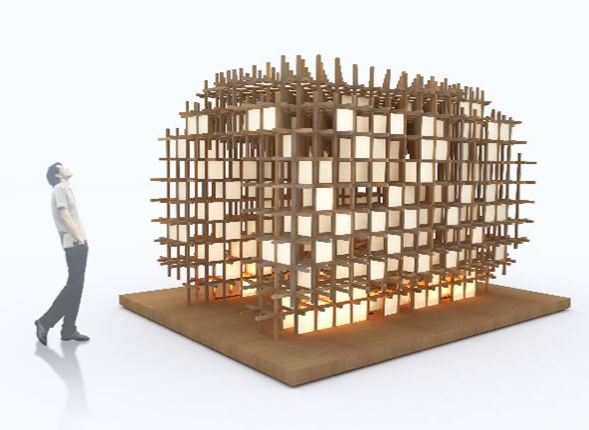
■　木を大事に利用する新しいリサイクルシステム

・　生活形式の変化に応じて、何度でも組みなおすことができ、今までよりももっと長く木を使うことが出来ます。
・　長く使われてきた古材、捨てられるような端材などでもつくることができます。

■　未来へつなぐ

・　日々進化する新しい技術と組み合わせることで、「暖かい棲みか」と未来へつなぐことができます。

●アルミを蒸着させ遮熱効果を高めた透湿防湿シートでつくったファブリックで千鳥(CIDORI)を覆う案。ダウンジャケットを着ているような暖かい空間になります。



●天然の柿渋を塗布して防水性を高めた和紙でつくった障子を千鳥(CIDORI)の格子の間にはめる案。適度に視線を遮ることで半屋外空間をつくりだします。

●自由自在に変形するスチールメッシュを下地にして調湿効果のある左官材を千鳥(CIDORI)に吹付ける案。左官の吹付け方を調整することで、一部窓のような部分を作ることができます。